

第 6 章

ホモロジー・de Rham コホモロジー

6.1 多様体のホモロジー

X を位相空間とする. X の l 次元ホモロジー群 $H_l(X)$ とは, X 中の「 l 次元のサイクル」と呼ばれる量が本質的に何個あるかを示すものである. ホモロジーの定義には何通りかあるが, 一般に l 単体と呼ばれる単位に分割し (三角形分割), 組み合わせ的な構造を利用して定義する.

6.1.1 単体・三角形分割

手始めに, まず l 単体を定義しよう.

定義 6.1: l -単体

\mathbb{R}^N の $l+1$ 個の点 v_0, v_1, \dots, v_l は, l 個のベクトル $v_i - v_0$ ($i = 1, \dots, l$) が線型独立のとき, 一般の位置にあるという.

一般の位置にある $l+1$ 個の点の集合 $\sigma = \{v_0, \dots, v_l\}$ に対して, それらの点を含む最小の凸集合

$$|\sigma| := \{a_0 v_0 + \dots + a_l v_l \mid a_i \geq 0, a_0 + \dots + a_l = 1\}$$

を l -単体 (l -simplex) と呼ぶ. σ の空でない部分集合 $\tau \subset \sigma$ に対して, 単体 $|\tau|$ のことを $|\sigma|$ の辺 (face) と呼ぶ.

定義 6.2: 単体複体

\mathbb{R}^N 中の単体の集合 K は, 次の条件を充たすとき (Euclid) 単体複体 (Euclidean simplicial complex) と呼ぶ:

- (1) $|\sigma| \in K$ ならば $|\sigma|$ の任意の辺はまた K に属する.
- (2) 二つの単体 $|\sigma|, |\tau| \in K$ が空でない共通部分を持つならば $|\sigma| \cap |\tau|$ は $|\sigma|$ と $|\tau|$ の共通の辺である.
- (3) $\forall |\sigma| \in K$ の任意の点 $x \in |\sigma|$ に対して, x 開近傍 U を適切に取れば U と交わる K の単体は有限個しか存在しないようにできる.

定義 6.3: 多面体・三角形分割

単体複体 K に対して, 集合

$$|K| := \bigcup_{|\sigma| \in K} |\sigma|$$

を定める. $|K| \subset \mathbb{R}^N$ を**多面体** (polyhedron) と呼ぶ.

位相空間 X に対して適当な単体複体 K を選び, 同相写像 $t: |K| \xrightarrow{\sim} X$ が与えられたとき, 同相写像 t を X の**三角形分割** (triangulation) と呼ぶ.

6.1.2 ホモロジー群

定義 6.4: 単体の向き

l 単体 $|\sigma|$ の頂点 $\{v_0, \dots, v_l\}$ の順序付き添字 $I = (i_0, \dots, i_l)$ 全体の集合 \mathcal{I} に以下の同値関係を定める:

$$\sim := \{(I, J) \in \mathcal{I} \times \mathcal{I} \mid \exists \tau \in \mathfrak{S}_{l+1} \text{ s.t. } \text{偶置換}, I = \tau J\}$$

このとき, $I \in \mathcal{I}$ の \sim による同値類 $[I]$ のことを単体 $|\sigma|$ の**向き** (orientation) と呼ぶ.

単体 $|\sigma|$ に向きが指定されているとき, σ の同値類を**向き付けられた単体**と呼び, $\langle \sigma \rangle$ と表す. 頂点が $I = (i_0, \dots, i_l)$ によって向き付けられているとき, 対応する向き付けられた単体を $\langle v_{i_0} \cdots v_{i_l} \rangle$ と書く.

定義 6.5: l -chain

単体複体 $K = \{|\sigma|_i\}$ の各単体に向きを指定し, それぞれ $\langle \sigma_i \rangle$ とする. K の l -単体 $\langle \sigma_i \rangle_l$ 全体によって生成される自由加群を K の l **次元鎖群** $C_l(K)$ と呼び, $C_l(K)$ の元を l -**チェイン** と呼ぶ.

$\forall c \in C_l(K)$ は形式和として

$$c = \sum_{i \in I_l} c_i \langle \sigma_i \rangle_l, \quad c_i \in \mathbb{Z}$$

と書かれる. 群 $C_l(K)$ の二項演算 $+$, 単位元 0 , 逆元 $-c$ はそれぞれ

$$\begin{aligned} c + c' &:= \sum_i (c_i + c'_i) \langle \sigma_i \rangle_l, \\ 0 &:= \sum_i 0 \langle \sigma_i \rangle_l, \\ -c &:= \sum_i (-c_i) \langle \sigma_i \rangle_l \end{aligned}$$

である. ただし, $\langle \sigma_i \rangle_l$ と反対に向き付けられた l 単体は $(-1) \langle \sigma_i \rangle_l \in C_l(K)$ と同一視する. このとき, 自然に

$$C_l(K) \cong \bigoplus_{I_l} \mathbb{Z}$$

である.

定義 6.6: 境界作用素

準同型写像

$$\partial_l: C_l(K) \rightarrow C_{l-1}(K)$$

を向き付けられた各 l -単体上

$$\partial_l \langle v_0 v_1 \cdots v_l \rangle := \sum_{i=0}^l (-1)^i \langle v_0 \cdots \hat{v}_i \cdots v_l \rangle$$

と定義する. ただし, \hat{v}_i は v_i を省くことを意味する.

命題 6.1: 境界の境界

$$\partial_l \circ \partial_{l+1} = 0$$

証明 ∂_l は $C_l(K)$ 上の線型作用素なので生成元 $\sigma := \langle v_0 v_1 \cdots v_{l+1} \rangle \in C_{l+1}(K)$ に対して示せば十分. $l = 0$ のときは自明なので $l > 0$ とする.

$$\begin{aligned} & \partial_l \circ \partial_{l+1} \sigma \\ &= \sum_{i=0}^{l+1} (-1)^i \partial_l \langle v_0 \cdots \hat{v}_i \cdots v_{l+1} \rangle \\ &= \sum_{i=0}^{l+1} (-1)^i \left(\sum_{j=0}^{i-1} (-1)^j \langle v_0 \cdots \hat{v}_j \cdots \hat{v}_i \cdots v_{l+1} \rangle + \sum_{j=i+1}^{l+1} (-1)^{j-1} \langle v_0 \cdots \hat{v}_i \cdots \hat{v}_j \cdots v_{l+1} \rangle \right) \\ &= \sum_{i>j} (-1)^{i+j} \langle v_0 \cdots \hat{v}_j \cdots \hat{v}_i \cdots v_{l+1} \rangle - \sum_{i<j} (-1)^{i+j} \langle v_0 \cdots \hat{v}_i \cdots \hat{v}_j \cdots v_{l+1} \rangle = 0. \end{aligned}$$

■

命題 6.1 より,

$$\begin{aligned} Z_l(K) &:= \{c \in C_l(K) \mid \partial_l c = 0\} = \text{Ker } \partial_l \\ B_l(K) &:= \{\partial_{l+1} c \in C_l(K) \mid c \in C_{l+1}(K)\} = \text{Im } \partial_{l+1} \end{aligned}$$

とおくと

$$B_l(K) \subset Z_l(K)$$

となる.

! $Z_l(K)$ を l -輪体群もしくはサイクル, $B_l(K)$ を l -境界輪体群もしくはバウンダリーと呼ぶ.

定義 6.7: ホモロジー群

上で定義した $Z_l(K)$, $B_l(K)$ に対して, 部分群の剰余類を考えることにより

$$H_l(K) := Z_l(K)/B_l(K)$$

は商群を作る. これを K の l 次元ホモロジー群と呼ぶ.

サイクル $c \in Z_l(K)$ を代表元にもつホモロジー類 $[c] \in H_l(K)$ に対して, 別のサイクル $d \in Z_l(K)$ が $d \in [c]$ であるとき, i.e. $c - d \in B_l(K)$ であるとき, c, d は**ホモローグ** (homologue) であるという.

定理 6.1: ホモロジー群は位相不変量

ホモロジー群は位相不変量である. i.e. 位相空間 X, Y が互いに同相であるとし, それぞれの三角形分割 $f: |K| \xrightarrow{\sim} X$, $g: |L| \xrightarrow{\sim} Y$ を与える. このとき

$$H_l(K) \cong H_l(L) \quad (l = 0, 1, \dots)$$

が成り立つ.

6.2 de Rham コホモロジー

6.2.1 特異ホモロジー

定義 6.8: 標準 k -単体

\mathbb{R}^k の部分集合

$$\Delta^k := \{(x^1, \dots, x^k) \in \mathbb{R}^k \mid x^i \geq 0, x^1 + \dots + x^k \leq 1\}$$

は**標準 k -単体** (standard k -simplex) と呼ばれる.

定義 6.9: C^∞ 特異 k -単体

C^∞ 多様体 M に対して, 任意の C^∞ 写像

$$\sigma: \Delta^k \rightarrow X$$

を X の C^∞ **特異 k 単体** (singular k -simplex) と呼ぶ. M の C^∞ 特異 k 単体全体によって生成される自由加群を $S_k(X)$ と書き, その元を M の C^∞ **特異 k -チェイン** と呼ぶ.

定義 6.10: 境界作用素

$i = 0, \dots, k$ に対して連続写像 $\varepsilon_i: \Delta^{k-1} \rightarrow \Delta^k$ を

$$\begin{aligned}\varepsilon_0(x_1, \dots, x_{k-1}) &:= \left(1 - \sum_{i=1}^{k-1} x_i, x_1, \dots, x_{k-1}\right), \\ \varepsilon_i(x_1, \dots, x_{k-1}) &:= (x_1, \dots, x_{i-1}, 0, x_i, x_{k-1})\end{aligned}$$

と定義する. このとき, **境界作用素**

$$\partial: S_k(M) \rightarrow S_{k-1}(M)$$

を次のように定義する:

$$\partial\sigma := \sum_{i=0}^k (-1)^i \sigma \circ \varepsilon_i$$

サイクル $Z_k(M)$ および k -境界輪体群 $B_k(M)$ を

$$\begin{aligned}Z_k(M) &:= \text{Ker } \partial_k \\ B_k(M) &:= \text{Im } \partial_{k+1}\end{aligned}$$

と定めると, 相変わらず $\partial \circ \partial = 0$ であるから $B_k(M) \subset Z_k(M)$ が従う. 故に部分群の剰余類を考えることができる:

定義 6.11: 特異ホモロジー群

$B_k(M), Z_k(M)$ に対して, 商群

$$H_k(M) := Z_k(M)/B_k(M)$$

を M の**特異ホモロジー群**と呼ぶ.

6.2.2 微分形式のチェイン積分と Stokes の定理

M を C^∞ 多様体, $S_\bullet(M) := \{S_k(M), \partial\}$ を M の C^∞ 特異チェイン複体とする.

M の特異 k 単体

$$\sigma: \Delta^k \rightarrow M$$

は C^∞ 写像であるから, k -形式 $\omega \in \Omega^k(M)$ の引き戻し (命題??付近を参照) $\sigma^*\omega \in \Omega^k(\Delta^k)$ が定義される.

定義 6.12: 特異 k 単体上の積分

$\omega \in \Omega^k(M)$ の σ 上の積分を

$$\int_{\sigma} \omega := \int_{\Delta^k} \sigma^* \omega$$

により定義する. 右辺はただの k -中積分である.

一般の C^∞ 特異 k -チェーン $c \in S_k(M)$ が $c = \sum_i a_i s_i$ と表示されているときは

$$\int_c \omega := \sum_i a_i \int_{\sigma_i} \omega$$

と定義する.

定理 6.2: チェイン上の Stokes の定理

C^∞ 多様体 M の特異 k -チェーン $c \in S_k(M)$ と $k-1$ -形式 $\omega \in \Omega^{k-1}(M)$ に対し, 以下の等式が成立する:

$$\int_c d\omega = \int_{\partial c} \omega.$$

6.3 de Rham の定理

6.3.1 de Rham コホモロジー

定義 6.13: 閉形式・完全形式

k -形式 $\omega \in \Omega^k(M)$ は

- $d\omega = 0$ のとき **閉形式** (closed form)
- $\exists \eta \in \Omega^{k-1}(M), \omega = d\eta$ のとき **完全形式** (exact form)

と呼ばれる.

M 上の閉じた k -形式全体を $Z^k(M)$, 完全な k -形式全体を $B^k(M)$ と書く:

$$Z^k(M) := \text{Ker}(d : \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^{k+1}(M)),$$

$$B^k(M) := \text{Im}(d : \Omega^{k-1}(M) \rightarrow \Omega^k(M)).$$

$d \circ d = 0$ なので, $B^k(M) \subset Z^k(M)$ である.

定義 6.14: de Rham コホモロジー群

$\Omega^k(M)$ の部分ベクトル空間 $B^k(M)$, $Z^k(M)$ に対して, 商空間

$$H_{\text{DR}}^k(M) := Z^k(M)/B^k(M)$$

は M の k 次 **de Rham コホモロジー群** と呼ばれる.

k -形式 $\omega \in \Omega^k(M)$ に対し, それを代表元に持つ剰余類 $[\omega] \in H_{\text{DR}}^k(M)$ を ω の表す **de Rham コホモロジー類** と呼ぶ.

$$H_{\text{DR}}^\bullet(M) := \bigoplus_{k=0}^n H_{\text{DR}}^k(M)$$

を M の **de Rham コホモロジー群** と呼ぶ.

$x \in H_{\text{DR}}^k(M)$, $y \in H_{\text{DR}}^l(M)$ が $\omega \in \Omega^k(M)$, $\eta \in \Omega^l(M)$ によって $x = [\omega]$, $y = [\eta]$ と書かれるとき, $H_{\text{DR}}^\bullet(M)$ 上の積 $\cdot : H_{\text{DR}}^\bullet(M) \times H_{\text{DR}}^\bullet(M) \rightarrow H_{\text{DR}}^\bullet(M)$ を以下のように定義する:

$$x \cdot y := [\omega \wedge \eta] \in H_{\text{DR}}^{k+l}(M)$$

このとき二項演算 \cdot は well-defined である, i.e. ω, η の取り方によらない.

上で定義した積構造の入った $(H_{\text{DR}}^\bullet(M), \cdot)$ のことを M の **de Rham コホモロジー代数** と呼ぶ.

6.3.2 de Rham の定理

コホモロジー群とホモロジー群は, Stokes の定理によって双対性を持つ.

C^∞ 多様体 M および M の C^∞ 特異 r -チェイン $S_k(M)$ を与える. $\forall c \in S_k(M)$, $\forall \omega \in \Omega^k(M)$ ($1 \leq k \leq n$) をとる. ここで双対内積 (duality pairing) を

$$\langle \cdot, \cdot \rangle : S_k(M) \times \Omega^k(M) \rightarrow \mathbb{R}, (c, \omega) \mapsto \int_c \omega$$

と定義する. このとき $\langle c, \omega \rangle$ は双線型であり, $\langle \cdot, \omega \rangle : S_k(M) \rightarrow \mathbb{R}$, $\langle c, \cdot \rangle : \Omega^k(M) \rightarrow \mathbb{R}$ はどちらも線型写像である:

$$\begin{aligned} \langle c_1 + c_2, \omega \rangle &= \int_{c_1 + c_2} \omega = \int_{c_1} \omega + \int_{c_2} \omega = \langle c_1, \omega \rangle + \langle c_2, \omega \rangle \\ \langle c, \omega_1 + \omega_2 \rangle &= \int_c (\omega_1 + \omega_2) = \int_c \omega_1 + \int_c \omega_2 = \langle c, \omega_1 \rangle + \langle c, \omega_2 \rangle \end{aligned}$$

Stokes の定理は

$$\langle c, d\omega \rangle = \langle \partial c, \omega \rangle$$

と書かれ, この意味で d と ∂ は互いに随伴写像である.

duality pairing $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は内積 $\Lambda : H_k(M) \times H_{\text{DR}}^k(M) \rightarrow \mathbb{R}$ を誘導する. それは以下のように定義される:

$$\Lambda([c], [\omega]) := \langle c, d\omega \rangle$$

定義 6.3.2 は well-defined である.

定理 6.3: Poincaré 双対

M がコンパクトな C^∞ 多様体ならば $H_k(M)$, $H_{\text{DR}}^k(M)$ はともに有限次元である. さらに写像

$$\Lambda: H_k(M) \times H_{\text{DR}}^k(M) \rightarrow \mathbb{R}$$

は双線型かつ非退化である. i.e. $H_r(M) = (H_{\text{DR}}^k(M))^*$ (双対ベクトル空間) である.

補題 6.1: Poincaré の補題

\mathbb{R}^n の de Rham コホモロジーは自明である:

$$H_{\text{DR}}^k(\mathbb{R}^n) = H_{\text{DR}}^k(\text{一点 } p_0 \in \mathbb{R}^n) = \begin{cases} \mathbb{R} & : k = 0 \\ 0 & : k > 0 \end{cases}$$

i.e. $\omega \in \Omega^k(\mathbb{R})$ を任意の閉形式とすると, ある $k-1$ 形式 η が存在して $\omega = d\eta$ を充たす.